光と闇

蒼風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と闇

【Ｎコード】
Ｎ０８４４Ｄ

【作者名】
蒼風

【あらすじ】
成績優秀、スポーツ万能の高校生――黄昏聖。いつもと変わらぬ高校生活を送っている。――筈だった。まさか、自分に常人でない才能が眠っているとは夢にも思わなかったであろう。そして、それがきっかけで様々な人に出会い、過酷な戦いに巻き込まれていくとは――――

プロローグ（前書き）

初めまして、この度「光と闇」を書かせて頂きます。
感想など貰えたら幸いです
又、アドバイスなどでも構いませんので宜しくお願いします。

プロローグ

だだっ広い部屋でいくつもの巨大コンピュータが同時に作動している。
その前にイスに腰掛けている男が一人。
すると、一つのコンピュータがピー！という電子音を発した。
そこに表示されたのは赤い髪をした高校生くらいの青年。名前は『黄昏　聖』――
男はそのコンピュータに目を止めると興味深そうに文字を読み始めた。

（遂に見つけた）
男は腰掛けていた椅子から立ち上がった。

時は戦国。しかし、『現実世界』ではない。
ここは言わば『もう一つの世界』つまり『異界』である。
『現実世界』とここの『異界』とは『世界の扉（ワールド・ゲート）』という物で繋がっている。
こちらの世界では今、戦争の真っ最中だがこの戦争は『現実世界』にも危害を及ぼす恐れがあるのだ。
何故なら『闇の扉（ダーク・ゲート）』と呼ばれる扉を通って魔物達が『現実世界』に現れようとしているからだ。
この戦争が終われば『闇の扉（ダーク・ゲート）』も閉じ、『現実世界』も再び平和になる事だろう。
そして、この戦争を終わらせるには『現実世界』から全てを終わらせる『鍵』となる存在を連れて来なければならないのだ。
その『鍵』となる存在を男達は『切り札』と呼ぶ。

今、男がいるのは彼らの組織『カーネル』の小部隊の基地である。
男は自動扉を通って廊下へ出る。
さっきから何やら建物内が騒がしいからだ。
「ヴァンさん！敵襲です！」
ちょうどその時に一人の兵士らしき男が駆け寄ってきた。
「うむ、思ったより行動が早い連中だ。空いている者を迎撃に回せ！大丈夫だ。『覚醒術』の能力（ちから）ならこちらの方が有利だ。」
（とにかく今は時間を稼がなくては……彼をこちらへ迎え入れなくては……。）
男が兵士の後姿を見送ったその時である。不意に悲鳴のような声とドサッ！という人が倒れる音が聞こえてきた。
音のする方から察するとそんなに遠くではないようだ。
男は音のする方へと走る。そこにいたのは――
「渚！？」
彼の仲間である。全身には恐らく足元に転がっている兵士を殺した時に付いたであろう返り血がべっとりと付いていた。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
青年は狂ったような声を上げ、男に突進する。
（操られてるのか？出来れば仲間とは戦いたく無いが……この際、止むを得んな）
男の両腕に炎が纏う。
『十字の獄炎（クロス・フレア）！！』
両腕の炎は十字を形作り通路いっぱいに広がる。
青年は向ってくるそれの間――つまり十字の左下の隙間――を通り抜けて回避する。
炎が通り過ぎ突き当たりにぶつかり、粉々に粉砕されたその奥から外の光景が見える。

それを見た時、男は唖然とした。
軍隊は壊滅状態にあり、見渡す限り死体、死体、死体である。
男は舌打ちする。
（やはり人数が少ない我々では耐えきれぬか）
しかし、そんな思考をする暇も青年は与えてはくれなかった。男の首根っこを掴んでさっきの炎で焦げた壁に叩きつけた。
「くっ！」
男の額に『炎』の文字が浮き出る。必死に力を搾り出すも青年の首を絞める力の方が強く、段々と意識が薄れて――。

『【予言】！！渚は気絶する！』

唐突にそんな声が聞こえたかと思うと青年の首を絞めていた腕がズルリと下がって床に仰向けで気絶した。
「ヴァン！今の内に行って！
粉々に吹き飛んだ壁の向こうに一人の少女の姿があった。
「ティアラ？お前、【予言】の能力（ちから）を使ったのか！？」
男がその少女に駆け寄る。
少女は笑って「平気平気」と返す。
「時間が無いよ！ここは私が何とかするからヴァンは早く行って！」
しかし、男は躊躇った。もしもの事を考えるととてもじゃないがやりきれない。
「ヴァンの馬鹿ー！」
「っ！」
唐突に少女に怒鳴られる。男が躊躇っているのを悟ったのだろう。
「何戸惑ってるの！？このままじゃこの世界が危ないのよ！？この世界だけじゃない！あっちの世界だって危険に晒す事になるのよ？分かってる！？それとも何？ヴァンは私を信用してない訳？」
早口で言ったせいか言い終わると少女は激しく咳き込んだ。

男は少女の肩に手を置いて「その通りだ。」と言った。
「この地区を任された司令官ともあろう者がこんな事で悩んでいては駄目だな。うむ、私は引き続き任務を遂行する。ティアラ、頼めるな？」
「だから、最初から言ってるじゃない？準備は万全よ！」
少女は男とは反対に建物内に入っていく。
男が歩き出そうと一歩踏み出した時――。
「やぁ、何してるんだい？」
夜という闇から一人の『人物』が現れた。
「初めまして！君に名乗るのはもったいないから名乗らないよ！」
その『人物』は男を小馬鹿にしたような態度を取る。
「貴様が……渚を操っていたのか？」
男は落ち着き払った声でそう問う。
「ははは、バレてたか。その通り！僕があの青年を操っていた張本人さ！」
『人物』は細い右腕を口に当ててククと笑う。
「貴様――！」
男は怒りを露わにし、両腕を頭上に掲げる。
『火竜（サラマンダー）！！』

炎が竜巻のように大きく長く渦を巻き、それは巨大な火の竜を形作る。
「無駄だよ？そんな事しても……」
ゾクリ！――『人物』の殺気が男の背中に悪寒を走らせる。その直後――
『……操作！！』
『人物』を狙う筈の火の竜は大きくそれて天へと消える。

「あっはは！結構飛んだねー！どの位飛んだかな？」
『人物』はわざとらしく火の竜が消えていった方角を右手をひさし代わりにして見上げる。
「貴様――！」
男は姿勢を低くして右腕を後ろに伸ばす。すると、二人の間に一つの影が割って入った。
「ヴァンはん！間に合うたな！？」
それは青年だった。しかも、両腕が【獣化】している。
「サイガ！」
男は構えを解いて青年の横に並ぶ。
「ってな訳でさっさと行き！ヴァンはんには『世界の扉』を通って『切り札』を連れてくるっちゅう重大な使命があるんやからな！」
青年の額にある『獣』と書かれた印が光る。すると、両腕に次いで両足も【獣化】する。
「いやぁ、面白い人間だね、君は！」。
『人物』は首をコキコキ鳴らして無防備に手を開いて見せる。
「ほら、僕はここにいる！殺したかったら殺せばいい！君も行きたかったら行けばいい！それは各々の自由だよ！」
「ほな、そうさせてもらうで！ヴァンはんも！早よ行きなはれ！」
男は力強く頷くと『人物』の横を通り過ぎて闇へとその姿を消した。
「さぁて……わいの能力、思いっきり味わわせたる！」
青年は【獣化】した足を使って弾丸の如く『人物』へ突進した。

◆　◆

関所を抜けるとそこはさっきとは比べようにならないほど悲惨だった。
男はなるべく無駄な戦いを避けて行こうと試みる。

ただ一点を目指して走る。この世界にある複数の『世界の扉（ワールド・ゲート）』の内、一番近場の扉、ただ一点を目指して――

すると、男の視界の端から矢が飛んで来た。男は一瞬反応が遅れて矢が脇腹を刺さ――

『一時停止（ストップ）！！』

――らなかった。

矢は男の眼前でまるで時が止まったかのように動かなくなった。

「舞姫！」

暗闇から少女が小走りでやってくる。

「えと……ヴァンさん！今の内に……『扉（ゲート）』に行って下さい！お願い……します！」

少女は男の袖を引いて矢が当たらない場所へ誘導する。それから少し経つと再び矢が何事もなかったかのように動き出し、誰もいない地面に刺さった。

「舞姫……サイガとティアラが基地周辺で戦っている。二人に加勢してくれないか？私はこれから『扉（ゲート）』を通って異界へと行ってくる――」

そこまで言って男は気付く。少女のすぐ真後ろで兵士が剣を振り下ろそうとしている事に――

「舞姫！伏せろ！！」

男は少女を自分の後ろへと庇って兵士の剣を受け止める。

「ぐっ……！」

受け止めた両手の平から血が滲み出る。しかし、男はお構いなしに兵士を殴り飛ばした。

「ヴァ、ヴァンさん……？」

少女は男の手から滴る血を見てオロオロし始めた。

「平気だ。私に構わず行け！頼んだぞ！」

男は少女に有無も言わさず走り出した。

◆　　◆

青年と『人物』との戦いは圧倒的な実力差で『人物』の方が有利だった。

青年は既に両腕両足だけでなく、顔も【獣化】していた。その髪は獣のそれと変わらない。

「おっとっと！さっきまでの威勢はどこ行っちゃったかな？」

『人物』はうーんと背伸びすると青年に歩み寄る。

「来るなや！噛み砕くで！？」

青年は本物の獣らしくグルルと喉を鳴らす。

「……まだ威勢は良いみたいだね。」

『人物』は地面に転がっている刀を手に取る。

「それじゃ……フィニッシュと行こうか？」

そして、目にも止まらぬ速さで青年を押し倒すと刀の切っ先を青年の首に当てる。

「じゃあね、猛獣君♪」

刀を振り下ろすその瞬間――

「サイガさん！」

背後から声が聞こえる。ゆっくりと『人物』が振り返るとその向こうにはさっきの少女が顔を強張らせて立っていた。

「チッ！邪魔が入ったね。」

『人物』は嘆息して刀を放り投げる。それはクルクルと回って少女の横に刺さる。

少女はビクッと体を震わせて後ずさる。

「今回は多めに見てあげるよ。君達なんかいつでも消せるんだから……」

『人物』は青年の肩をポンポンと叩くと少女の横を通って闇に溶けて行った。

「舞姫はん！ヴァンはんは？」
『人物』が消えたのを見届けてから【獣化】を解いて少女の元へ駆け寄る。
「あの……『扉（ゲート）』へ向かいました……」
「さよか！ならわいらも見送りに……！」
その時だ。建物で大きな衝撃と共に爆発があった。
「まさか……中に誰かいるんか！？」
「あ、そういえば……ティアラさんが……」
少女がオロオロしてるのとは対照的に青年は走り出した。

◆　◆

建物の中で奮闘していたティアラは爆発に巻き込まれて右足を損傷していた。
「くっ……もう、駄目……！」
ティアラが鉄パイプを支えに立つのがやっとになっていると前後から兵士が刀を携えてゾロゾロと歩み寄る。
「来るな～！」
ティアラが鉄パイプを振り回すが、反動で尻もちをつく。
「はっ！所詮はガキか！一気に仕留めるぞ！」
兵士の一人がそう合図すると一斉に少女目掛けて刀を振り下ろす兵士達。

「そうはさせるか！」

すると、少女の前に緑色の竜巻が現れ、その中から出てきた腕が兵士を殴り飛ばす。
竜巻が止んでそこにいたのは――
「渚！？」

さっき『人物』に操られていた青年である。
少女によって安全な部屋に寝かせていたのだがやっと眠りから目覚めたのである。
「ティアラ！俺の後ろにいろ！」
青年はパンチとキックを使い分けて兵士達を圧倒していく。
一通りなぎ倒した後、青年はふぅと息をついて壁に寄り掛かる。
「やっぱ病み上がりはキツイな……。まともに動けやしねぇ！」
確かに青年の息は短距離走を全力疾走した後のように乱れている。
そこで青年は「ん？」と首を傾げて少女の右足を見る。
「ティアラ！怪我、してんのか？」
「ん……でも、大丈夫！大した事ないよ！」
少女は鉄パイプで先を行こうとするが、足もとがフラついて青年に支えられる。
「無理するな、ティアラ！」
青年が鉄パイプを蹴り払って歩幅を合わせて歩き始める。
「ティアラはん！渚はん！」
一つ目の角を曲がった所で【獣化】出来る青年と合流した。（勿論、今は【獣化】していない。）
「よぉ、サイガ！無事だったか？ヴァンは？」
青年が【獣化】の青年に問いかけると【獣化】の青年は頷いて微笑んだ。
「『扉（ゲート）』に向かってるそうや！ところでさっき爆発があったみたいやけど大丈夫やったんか？」
「爆発？そうか。ティアラ、お前のその傷はその爆発の時の物か！」
青年が確信を持った目でティアラを見る。
「ううん。もう本当に大丈夫だから！さ、皆でヴァンを見送りに行ってあげよ！」
少女は元気一杯な風に振る舞って駆け出すが、途中である事に気付いて戻ってきた。

「あ、そうだ。渚、ちょっとかがんで！」
「ん？」
青年が膝を折ってかがむと少女はその頬に唇を近付ける。そして
――
「ありがとう」
そっとキスをした。
「うおっ！？ティアラ？」
青年は反射的に身を引く。顔は見る見るうちに赤くなっていく。
「ほら、早く見送りに行こうよ。」
「あ～、俺はいいや！」
少女の誘いに青年は頭を書いて遠慮がちに答える。顔はまだ赤い。
「え～、何で？」
少女の問いに青年は背を向ける。
「操られていた時、少なからず意識はあったんだ。それでヴァンを襲っちまったってのは分かってる。俺はあいつに会わす顔がねぇからよ！俺抜きで行ってやってくれよ！」
「ティアラはん。本人が本人がそう言ってるなら無理に引き止める必要もあらへん！わいらだけで行くで！早(は)よ行かな、ヴァンはんが行ってまう！」
【獣化】の青年に少女が頷くと再び勢い良く駆け出していく。が、角から出てきた人物に思いっきり衝突した。
「ひゃっ！」
「キャッ！」
そして、同時に尻もちをつく。
「舞姫はん？随分遅い到着でんな？」
そう、少女とぶつかったのは男を助けたあの少女だ。
「あ、えっと……その……助けに、来た…んです……けど……」
男を助けた少女がおずおずと答える。
「えと……大丈夫、だったんですか？」
「あぁ、心配あらへん！これからヴァンはんを見送りに行くんや

！舞姫はんも来なはれ！」
今度は【獣化】の青年が二人の少女を従えてその場を後にした。
一人残された青年はようやく赤面がおさまり静かに天井を仰いだ。

◆　　◆

さっきまでの騒々しさとは違い、ここは静かな洞窟だ。
その一番奥には白い（どっちかと言ったら銀に近い）扉が行く手を阻むように閉まっている。
これが『世界の扉（ワールド・ゲート）』である。
そこで男は懐から頭に三日月のような形をした物が付いている金の鍵を取り出した。
これが『世界の扉（ワールド・ゲート）』を開ける為の鍵なのである。
これで……異界に――そう思った直後だ。
静まっていた洞窟内に大きな振動が生じた。無論、地震などではないのは男も十分分かっていた。
自分が来た道を無表情で睨み続ける。そこに現れたのは二人の兵士だった。
そして、その二人の兵士が道を開けるように左右に分かれるとそこから二人の兵士よりかなり背の高い兵士が現れた。
「貴様は……！」
男は反射的に構える。
「『覚醒者』よ、私の部下が随分世話になったようだな。そのお礼は……たっぷりさせてもらうぞ！」
一際背の高い兵士は腰から長剣を抜く。
男も右手を掲げる。素早く決着を付けたい所だ。
『レイプリル！！』

突如、出現した炎の塊は徐々に長槍へとその姿を変えていく。
「おぉぉぉぉ！！」
三日月の鍵を懐にしまって男は突進した。
槍が物凄い速さで背の高い兵士を襲う。
しかし、それを上回る速さで体を翻した兵士は反撃とばかりに長剣を振るう。
「チッ！」
長剣をレイプリルで受け止める男だが、あまりの衝撃に膝を折った。
「終わりだ。死ね！」
兵士が間髪入れずに長剣を振り下ろす。が――
『一閃（クリティカル）！！』

鋭い爪が兵士の背中に深い傷を負わした。その爪の持ち主は……
「サイガ！」
【獣化】の青年がヒラリと男の前に降り立つ。その【獣化】した両腕を構える。
ゆっくりと崩れていく兵士を見ていた部下らしき兵士二人が悲鳴を上げて逃げ出して行った。
それと入れ違いに少女二人が走ってきた。
「サイガ！ティアラ！舞姫！どうしてここに？」
「見送りや！それ以外に何があんねん！わいらはヴァンはんの部隊なんやからヴァンはんを見送る義務がある。そうやろ？」
【獣化】の青年が笑う。それに続いて【予言】の能力を持つ少女がピースしてほほ笑む。男を助けた少女は無理に笑うが、笑顔が強張っている。
「……皆、恩に着る。」
男は再び懐から三日月の鍵を取り出して扉にある小さな鍵穴に差し込む。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！――扉が重々しい音を立てて手前に開く。
「それでは皆！必ずや『切り札』を手にして戻ってこよう！」
男がそう言って扉に足を踏み入れようとしたその時――
「あ……」
男を助けた少女が小さな声を上げる。
「どうしたの？舞姫？」
【予言】の少女が問う。
「いえ……異界に行くことはその鍵で出来ますけど……その、異界からはどうやって戻ってくるんですか？」
「それなら問題ない。我々の調べでは『切り札』も鍵を持っているらしいからな。」
男はそう言って扉へ行こうとするが、ふと足を止める。
「そういえば渚は無事か？」
「あぁ、無事や！『ヴァンを襲っちまったってのは分かってる。俺はあいつに会わす顔がねぇからよ！俺抜きで行ってやってくれよ！』って言うのが渚はんの伝言や！」
【獣化】の青年があの青年の声色を真似するが、いかんせん彼独特のなまりが残っており、あまり似ていない。
「そうか。良かった！」
男はホッと胸を撫で下ろす。そして、今度こそ扉へ歩み寄る。
「皆！私が……必ずや『切り札』を連れて帰って来ようぞ！」
その言葉を最後に男は扉の向こうへと消えた。
今、全てが始まる――！

～続く～

第一章「異変」

ある土手の橋の下――
そこに突如として白い扉が現れた。
「やっと着いた……」
扉がゆっくりと開き中から現れたのは男だった――

俺の名前は黄昏　聖。しがない高校二年生だ。
因みに髪の色は赤。勿論、染めた。確か、高校に入ってすぐ頃だったか。
俺の通ってる高校は校則ユルユルだから染髪してる奴なんてごまんといる。
まぁ、もっと行くとズル休みしてる奴もいる。で、俺もその一人でした……っと。
只今、自宅で昼寝中。まぁ、「昼寝したい」って理由だけでズル休みしたと言えばしたのだが……。ズル休みの理由なんてこんなもんよ。
ついでに言うと俺に家族はいない。父親は俺が小さい時に他界、母親はそのショックで俺と兄貴を捨てた。ショックで捨てたってどんな親だよって突っ込みは受け付けない。うん。
で、その兄貴も半年前くらいから行方不明。そして、現在俺は一人暮らしって訳。
俺はベットから這い出て時計を確認する。現在時刻、午後４時半。部活がない奴はもう帰宅時間か……。
ちょっと高校周辺の場所に行ってみるか。別に怪しまれはしないだろう。
俺は青いジーパンに穿き替えて黒いコートを羽織り、三日月が頭

に付いた金色の鍵のペンダントを掛ける。これは……兄貴から貰った大事な物だから……。そして、その上から紺のマフラーを巻く。（今は１２月中旬の為、かなり寒い。）

そうして、自宅（一軒家だ）を出た俺はまっすぐ駅へと向かう。高校の最寄り駅はその駅から６つ先だ。

あ、言い忘れてたけど俺は別に不良って訳じゃない。自分で言うのもなんだけど成績優秀、スポーツ万能だ。

さて、駅だ。定期を出して……って、あ！……定期忘れた。……まぁ時たまこういうヘマをする訳だ。……はぁ。

家に帰るのもめんどくさいので俺は素直に切符を買って目的地を目指す。

電車内は込み合ってはいないが、騒がしいガキや音楽大音量で聞いてる若者などが妙に多い。……はぁ。意味もなくため息を吐いてしまった。いや、意味は……あるか。

俺は暫くボーっとしていると目的地の駅に着いた。……この時間が何故か妙に長く感じたのは気のせいか？気のせいだな？気のせいだと思いたい。

そして、俺は駅を出る。瞬間、冷たい風が俺の頬を撫でる。さて、どこまで行くか。

取り合えず公園でいいか。高校から近すぎもなく、遠すぎもなくだからな。

俺はポケットに手を突っこんだまま足早に公園まで行くとそのベンチに身を沈める。

……ふぅ。ゆっくりと息を吐いた俺は周囲を見渡す。ん？一瞬、絶対に会いたくない人物が見えた……気がした。

あれは気のせいだな、うん。そうに違いない。頭ではそう思っていても思わずその場から移動しようとする。その時――

「あっ！聖ー！」

見事に見つかってしまった。……最悪。

その女は走って俺に近寄ってくる。まぁ、俺も今更逃げ出せない

ので出来る限りの笑顔で彼女を迎える。
こいつの名前は護耶　椿。長い黒髪と可愛い　顔立ちで男子生徒には人気が高い俺の幼馴染。因みににセーラー服が似合うってのでも学校じゃ有名らしい。
実を言うと俺もモテる方なんだけどな、うん。ただ、俺の場合は何故かモテる度に他のクラスメートやら同学年やらに妬まれるって事だ。
「どうしたの？ズル休みしてたクセに？」
う……相変わらず嫌味っぽい奴だ。こいつとは小中高と一緒だが、いつも俺に対してはかなり嫌味を言ってくる。だから、嫌いなんだよ、こいつは！
「別に？暇だから来ただけだ。」
「暇だと思うなら最初から学校来ればいいじゃない。」
「眠かったんだ。」
「普段、ちゃんと寝てない証拠でしょ？」
それは確かに。最近は特に夜更かし多かったからな……。
俺は一つ嘆息すると公園の奥の方に行こうとする。が、椿に袖を強く引っ張られた。
「どこ行くの？」
口ではこう言うが明らかに「自分も一緒に行く」という意図が嫌というほど良く分かる。こうなった時のこいつはもう絶対に振り切れない。
「……お前、何気なく付いて来ようとしてるだろ？」
俺がストレートにそう聞くと椿は大きく頷いた。やっぱりね。こいつのこういう所は昔から変わらない。
「まぁ、断っても付いて来るんだろ、どうせ……」
俺はそう言って一人で進んで行く。その後を椿が満面な笑みで付いて来る。
「あっ！」
すると、不意に椿がそう呟いて俺のマフラーを強く引っ張る。

「いっ！？」
俺は当然、後ろへ体が反れる。しかも、力が女とは思えない。つまり馬鹿力……。
「聖、あれ！」
「あ？」
椿の指差した方向、ちょうど俺や椿の高校辺りの空が一面黒くなっている。
「何だ、ありゃ？」
「行くよ、聖！」
俺が首を傾げていると椿に引っ張られて怪奇現象が起きてる高校付近へと連れて行かれる。……マフラー引っ張られながら。
「いって！お前、マフラー引っ張んな！マフラー！」
そこまで叫んでようやく椿は解放してくれた。俺は歩きながら首を押抑えてごほごほやっていた。当然だろ。首締まってたんだから……。
それにしても何で今日はこうも色々な目に遭うんだ？定期忘れたり、椿に出会ったり、マフラー引っ張られたり、怪奇現象見たり……。
と、ごちゃごちゃ考えていると目的地の高校に辿り着く。
真黒な雲が頭上を覆っているせいか……いや、それだけじゃない。が、とにかくこの位置に来た途端、辺りが急に暗くなった。まるで、街灯がない真夜中だ。
しかし、自分でもあり得ないと思うほどに目はすぐに暗闇に慣れた。隣にいた椿も同じなのだろう。俺を見て安心したような笑みを浮かべる。
そして、怪奇現象の正体を目の当たりにする。その瞬間――
「なっ！？」
絶句する。この世の物とは思えない物がそこにあったからだ。いや、『あった』というよりは『いた』という表現の方が正しいだろう。

『それ』はかろうじて人の形はしているものの全身が真っ黒で影のようなのだから……。
周りも『黒』だから、実際は殆ど見えない筈だが、何故か今は異様にはっきり見える。
『ギャァァァァァァァァ！！』
『それ』は奇声を発すると瞬間的に消えた。いや、周りに『溶け込んだ』。
しかし、何かが動いているのは分かる。『それ』の狙いは――
「椿！？」
それは明らかに椿を狙ったものだった。椿が目を瞑り、顔を手で庇うのが見えた。
俺は意を決して『それ』と椿の間に体を割り込ませた。
瞬間、俺の右肩に重々しい衝撃が走り、椿の横をバウンドしながら転がった。
「野郎！」
俺は肩の激痛に堪えて『それ』に飛びかかる。勿論、勝てるとは思ってない。でも、やらなきゃやられると思ったから戦う。
激痛がある右肩はあえて使わず左腕で『それ』に殴りかかる。
ドスッ！――確かに俺のパンチは『それ』の顔面に入った。
「な！？」
しかし、実際は食い込んでいただけでダメージなんて無いようだった。つまり、かなり柔らかい体だって事だ。
『グギャァァァァァ！！』
『それ』は再び奇声を発して俺を跳ね飛ばすと俺の目の前に一瞬で現れる。
勿論、空中を低空飛行で飛んでいる――いや、『飛ばされている』俺にはどうする事も出来ない。
（殺される！）
そう思った時である。

『火竜（サラマンダー）！！』

唐突にそんな声が聞こえたと思ったら俺の頭上を何かが通り過ぎるのを感じた。

仰向けになっているのにも関わらずその正体も掴めぬまま、『頭上を通り過ぎた何か』は『それ』に激突した。

大地を揺るがすような轟音が辺りに轟き、俺が地面に転がった時には激しく燃え盛る炎しか無かった。

「な……んだ、あれは……？」

俺は右肩を庇いながらゆっくりと起き上がる。激痛はまだまだ治りそうもない。

すると、頭上の黒い雲が晴れ、太陽が顔を覗かせた。恐らく『それ』が消えたからだろう。

「聖！大丈夫！？」

椿が駆け寄ってくる。そして、俺の右肩に触れようとして――

「痛ぇ！触んな！」

俺は飛び跳ねた。まだかなり痛いからな。

「黄昏　聖……」

不意にそんな声が聞こえてきた。俺と椿は同時に振り返る。

すると、そこには短い黒髪で長身の男がこちらへ向って歩いてきていた。

濃い緑色の作業服らしい物を来ている。

「誰だ、あんた？」

俺は思わずそう聞いてしまう。椿が止めたかったらしいが時既に遅し、男の表情が一瞬で険しいものになる。

「やれやれ、我々の『切り札』は礼儀を知らぬのか？」

男は低い声でそう言ってくる。

「分かったよ。俺はあんたが呟いてた黄昏　聖だ。で、あんたは？」

俺は嘆息してそう告げる。……何か、椿の視線が激しく痛いのだ

が……。
「私はヴァン＝レクシィード、【炎】の『覚醒者』だ！」
「……は？」
何かいきなり意味不明な単語が出てきた。しかも、この男……見たところ日本人っぽいけど、もしかしたら外人なのかも……？
「では、取り合えず向こうで話そうではないか？」
ヴァンと名乗った男はさっき椿と会った公園に向かって歩いて来る。
俺もそれに従おうとして――
「えっと、聖……わ、私は……？」
椿が話しかけてきた。す、すっかり忘れてた。でもなぁ、今更「帰れ」なんて言えねぇよ……。
と、そんな事を思案していると――
「今からする話は誰にも聞かれたくない。悪いが、帰ってくれるか？」
……。普通に言っちゃったよ、この男！
「え……そんな……！」
椿、普通に落ち込んでるし！何か、すげぇ気まずい雰囲気……。
「あ～、もう！来たいんなら来いよ！」
俺はこの雰囲気を振り払うようにそう叫んだ。
満面な笑みを浮かべる椿。が、ヴァンにはこれ程ないくらいに睨まれてる。
「べ、別にいいだろ！ここで帰そうとして簡単に帰せる奴じゃないんだよ！」
……まぁ、所詮は言い訳にしかならなかった訳で。ヴァンの不機嫌は直らなかった。
暫く三人で無言で歩く。これだけでも普通に気まずいよな、普通は？でも、この場合は……更に椿が俺に腕を組んできてるからなお気まずい。
「もう、ここでいいだろ。」

俺が顔が熱くなってくるのを感じながら近くのベンチに座った。
「で、さっきの変な生物は一体何だったんだ？」
恥ずかしさを紛らわせようとヴァンと椿がまだベンチに腰かけぬうちに俺は本題に入る。
「うむ、さっきの奴らは『魔物』という生物だ。……と言っても分からんか？」
「あぁ、さっぱり？」
俺は正直に答えたが……ヴァンには何故か睨まれた。う、俺……何か悪いことしたかな？
「コホン！『魔物』とは『闇の扉（ダーク・ゲート）』と呼ばれる物を通って『現実世界』に来た生物だ。更にこの『魔物』は――」
「ストーップ！」
ヴァンが早口で話し始めたので俺は一つずつ聞いて行くことにする。
「その『だーく・げーと』って何なんだ？」
「『闇の扉（ダーク・ゲート）』とは『我々の世界』にある扉の事だ。これを通った物には『闇の力』が付加される。」
「じゃあ、さっきの『魔物』も……？」
「そうだ。あの『魔物』の周囲の雲が黒かったのは『魔物』が『闇』を吐き出していたからだ。」
「ふ～ん……」
俺は一回頭の中で整理する。つまり、ヴァン達の世界には何かヤバそうな扉があってそれを通った者にはヤバい力が追加されるって訳か……。
「あっ！じゃあ、ヴァンもその扉を通って来たのか？」
俺が何気なく聞いたら鼻で笑われた。おーい！俺、何か変な事言ったか？
「私は『世界の扉（ワールド・ゲート）』と呼ばれる別の扉を通って来た。これはある特殊な鍵を使わないと通れないというデメリットがあるがな。」
「鍵……ねぇ」

ここで俺は暫く無言で考える。信じられない事だらけで混乱してる。
「じゃあ、さっき言ってた『カクセイシャ』ってのは？」
俺は取り合えず理解した……と思うから次の質問に行く。
「『覚醒者』とは人間の中にある『魔力』という力を引き出し、具現化する能力を持った人間の事だ。」
「成る程ねぇ……。じゃあ、俺の事を『切り札』って呼んでたのは？」
「我々には君の力が必要だ。君の力が全てを終わらせる『鍵』となる。」
「でも、俺は『覚醒者』じゃねぇぞ？」
「それはこちらの調べで分かっている。だから、今から君を……『覚醒者』として修行させようと思う。」
「何？」
くそ……こいつ、またこんな『危険』の言葉がピッタリな事を言いやがって……。
「いくら、お前が『切り札』と言えど『覚醒者』でなければ意味がないからな。行くぞ、こっちだ！」
「いやいや！待てよ、おい！」
何か今すぐ始まるみたいな空気だったから俺は慌てて止めた。もう少し聞いておきたい事があったから。
「『覚醒者』って誰でもなれんのか？」
「あぁ、修行すれば誰でもなる事は可能だ。」
ヴァンが軽く俺を睨みながら答える。
「じゃあ、こいつもなれるよな？」
俺は後ろの椿を指差す。椿はかなり驚いていた。当然だろ。説明の間、一度も発言しなかった奴なら尚更な……。
「まぁ、可能性はあるが……修行空間は一度に入れる人数は一つの入口につき二人までだ。それから一晩経たなければ入る事は出来んからな。それまでは待てない。」

「そうか。それなら仕方ない……か。」
俺は頭を掻く。可能性があるなら椿も一緒に『覚醒者』になればいい、と思ってたんだけど……。
「でも、聖、何でそんな事を……？」
椿が俺の背に話しかけてくる。俺としては結構言いにくい事なんだけど……。
「まぁ、何だ。お前もヴァン達の世界に来ればいいかな……って思っただけだ。お前、心配性だからさ……」
「聖……」
ただでさえ頬が熱くなるのに椿は更に……抱きついてきた。
「おわっ！？お前、離れろよ！」
俺達が暫くドタバタやってヴァンの方を向いたがヴァンの姿は無かった。
「あれ？ヴァン？」
俺はヴァンを探す。すると、駅の入り口前にその姿があった。せっかちだな。……いや、世界の危機がかかってるんだ。当然か。
俺と椿は慌ててそこに移動すると、ヴァンはかなり不機嫌そうにしていた。はいはい……あんたの意図は嫌と言うほど分かりますよ……。
「で？その修行空間ってのは何所にあるんだよ？」
駅の中を歩きながら俺は聞く。
「この先だ。」
すると、ヴァンはそう言うなり急に駆け出す。
「おい、ヴァン！？」
俺と椿が慌てて後を追う。その先は……行き止まりだった。まぁ、正確には改札口の隣の壁なんだけどさ……。
「……おい、ヴァン。これ、壁……だよな？」
俺がそう問うも完全に無視してヴァンは壁に手を近付けた。そして、壁に当たる筈だが――
「え？」

実際は壁をすり抜けた。ヴァンの手が手首まで壁に突き刺さっている。
「この壁はカモフラージュだ。この先まではその女も一緒に行ける。」
ヴァンは小声で言って壁を通って行った。俺と椿もその後に続く。でも、椿はかなりビビってたけど……。
そして、すり抜けた俺の視界に飛び込んできた光景は信じられなかった。
「これ……洞窟？」
流石にすぐ理解しろって言っても無理がある。そこは洞窟で広さもまぁまぁな所だったのだから……。
そして、その一番奥にヴァンが立っていた。その横には光の穴らしき物。
「これが修行空間って奴か……」
俺は何気なくそれに触れようとして――
「触るな！！」
ヴァンに思いっきり突き飛ばされた。その拍子で俺は頭を打つ。
「痛ぇな！何すんだ！」
「あ……すまん。少し待っていてくれ！」
ヴァンは軽く謝罪して光の穴に手をかざす。
すると、その手から紫っぽい筋が放たれて光の穴に吸い込まれる。どうなるのかと見守ってた俺達二人の前でその穴が徐々に形を変えていく。その形は扉そっくり……いや、完全な扉だ。
「この扉も厳重に封印されていてな。『覚醒者』がこうやって魔力を放出して正式な形に変えずに触れると……生身の人間なら死ぬか……良くて気絶だ。」
「じゃあ、ヴァンは俺を助けようとしたって訳か。」
俺は納得する。まぁ、事情が事情だからな。
「まぁな。では……準備はいいか？」
「あぁ……！」

俺が足を踏み出そうとした時――
「ぐっ！？」
右肩に激痛が走った。『魔物』に受けた傷がまた痛み出したらしい。
「聖！？そんな体で修行する気？」
椿は俺の体を支えてくれようとしたが……俺はそれを拒否した。
「俺がヴァン達の世界を救えるかもしれねぇんだ！それがたとえどんな世界でも……俺は一刻も早く救いたい！」
俺はチラリとヴァンを見る。ヴァンは無言でゆっくりと頷いてくれる。
「聖……それじゃあ！」
椿はそう言うと俺に近づいて頬にキスをした。
「え？つ、椿？」
俺はかなり動揺してる。多分、頬も今までに無いほど赤くなってるだろう。
「頑張れるおまじない！」
そして、椿はその場に座る。
「それじゃあ、私はここで待ってるわ！」
「うむ。修行空間では時間の流れが遅いからな。実際にはそれ程時間はかからないだろう。」
「そうか。じゃあ……椿、行ってくる！」
俺は扉の前に立つ。
「うん。聖……行ってらっしゃい！」
椿の声を背中に感じて――俺は扉の向こうに歩いて行った。

～続く～

第二章「修行」

体の中を光が通り過ぎて行く。
『修行空間』の中は光で満ちていてとても幻想的だった。
「そろそろだ……」
ヴァンがそう呟いて俺も周りではなく前を見る。
すると、段々と違った景色が見えてきた。
それが『修行空間』の本当の景色である――

「何つーか……すげぇな？」
『光の空間』から抜けて『修行空間』へと降り立った俺、黄昏聖はその場に立ち尽くしてしまう。そこはまるで教科書で見るような古代遺跡の前みたいだった。更に空から降り注いでいる光で（太陽とは違う光だ）昼間のように明るい。
「感心してる暇はない。お前には一刻も早く『覚醒者』になってもらわねばならない。」
ヴァンは後ろから呆れ顔で話しかける。
「わぁーってる！それで？一体、どんな修行なんだ？」
「うむ、こっちだ。」
ヴァンはゆっくりと古代遺跡の中に入っていく。俺もその後を追う。
と、その時――
「何っ！？」
上空から現実世界でもあった『魔物』が三体降って来た。
「何でここに『魔物』が？ちょっ！ヴァン！？」
俺が大声でヴァンを呼ぶが彼は既に遺跡の中へと姿を消してしまっている。

「くそっ！どうすりゃいい？俺はまだ『覚醒者』じゃねぇんだぞ！」
立ちふさがっている三体の『魔物』を倒す武器は無いか、辺りを見渡す。すると、いつの間にか傍らには一本の刀が鞘付きであった。
「ヴァン……やれって事か？」
俺はその刀を手にする。ズシッと重い。何とか鞘だけ抜くと魔物に突っ込んで行く。
「おらぁ！」
そして、その剣を力任せに振り下ろし……いや、叩きつけた。それをまともに食らった『魔物』はまるで地面に溶けるように消えた。
「はぁ……はぁ……」
行き着く間もなく残り二体の『魔物』が襲い来る。俺は正面から来た『魔物』を横薙ぎにしたが、後ろから来た『魔物』に気付かなかった。
「しまっ……！」
重い刀を両手で持った状態では動きも鈍くなり、『魔物』の爪が俺を襲う。その時――
『灼熱（マグマ・ボム）の弾丸！！』
横から『何か』が当たり、爆煙が辺りを包む。
それが徐々に止んでいく。完全に止んだ時、そこには地面に沈んでいく『魔物』の残骸しか無かった。
「前だけを見るな。死ぬぞ？」
見ると遺跡に入って行った筈のヴァンがこちらへと近づいてきている。右手はジュージューと音を立て、真っ赤になっている。
「ヴァン……」
俺は重すぎる刀を地面に刺して呼吸を整える。本物の刀を持ったことのない俺としてはとても耐えられるものじゃない。
（しかし、何で『魔物』は『修行空間』に入れたんだ？）

俺がそうやって思考を巡らせている時だった。
「簡単な事だ。あの『魔物』は『修行空間』によって作り出された言わば『人工魔物』という事だ。」
俺の心が読まれた。いや、表情を見ればある程度は分かるのだろうけど、それでも凄い。
「じゃあ……今のも修行の一つ？」
何とか冷静さを取り戻してそれだけ聞く。
「そうだ。この修行ではお前の武器はその刀だけだ。いや、万が一この修行でお前が覚醒出来なかったとしてもその刀で乗り切ってもらう事にする。いいな？」
「あぁ、絶対ここで覚醒してみせるっての！」
俺は刀を担いで数歩歩く。これだけでもかなりの修行だ。ヴァンが後ろを着いてきているのが分かる。そして、そのまま遺跡内へと入って行った。

◆　◆

遺跡内は外の温度が嘘のように寒い。今にも凍えそうな空間の中に三つの西洋騎士のような銅像が行く手を阻むように立ち塞がっている。
「寒っ！何だよ、ここ！」
コートを着ているにも関わらず震えてしまう俺。それに引き換えヴァンは俺より薄着なのに身震い一つしない。
「ここは『修行遺跡』と呼ばれる場所だ。ここで修行をしてもらう。」
パチン――ヴァンが指を鳴らす。すると、辺りが突然震動して眼前の銅像が動き出した。
「おわっ！？」
俺は無意識に飛び退く。銅像は右手に持った剣を掲げてゆっくり

と近づいてくる。
「なるほど……これが修行なのか？」
俺が刃が剥き出しの刀を振り下ろす動作をしてから構える。
「そうだ。私はここで待っている。頂上へ行って宝玉を取って戻ってきてくれ！」
俺はその言葉に頷いて走り出す。まず、正面の銅像の斬撃を避ける。続いて右側の銅像目掛けて刀を振り下ろす。
銅像は太い悲鳴を上げて崩れる。しかし、休む暇なく後ろに気配を感じ振り向きざまに刀で防御の構えを取る。
ガキィィン！――耳をつんざくような音と思い衝撃に俺は顔をしかめる。
更に後ろから三体目の銅像が襲ってくる。
一旦、後退した俺はそのまま銅像が立っていた先へと走る。
「全員は倒さずひたすら先を急ぐ、か……」
後ろでヴァンがため息をつくのが聞こえる。
「甘いな。そんな事ではこの修行は突破出来ん！」
ヴァンの声に呼応するように二つの銅像が迫ってくる。
「くっそ！」
俺は空中で半回転して銅像と向き合うと間髪入れずに横薙ぎにした。
ボガン！という破裂したような音と共に先頭の銅像が崩れ、その衝撃で後ろにいた銅像も巻き添えを食うように崩れた。
「なるほど……連鎖攻撃か……」
ヴァンが感心するように言う。俺はそれに頷くだけで答えるとさっさと先を急ぐ。
まずは一番近くにある石段を登る。最初は勢いよく、しかし少しずつ速度が落ちてくる。
その道中、敵は現れなかったが数多の罠が仕掛けられていた。
「いっ！？」
又だ。石段も半分くらいの所で何処からか複数の矢が乱れ飛んで

くる。
「くっ！」
慌てて伏せた俺の頭上スレスレのラインを矢がかすめていく。
「くそっ！危ねぇ！つーか、この石段長すぎ！」
実際その通りだった。半分登ってもまだ頂上が小さな点にしか見えない程度である。
「へっ……まだ、まだ……」
俺は刀を支えにして一段一段ゆっくりと登って行く。
すると、ガコン！という何かが外れたような音がして、その直後に石段の幅ギリギリの大岩が転がって来た。
「なっ！？あんな大岩トラップを……！」
俺は必死に策を巡らす。そして、辿り着いた答えは――
「おらぁっ！」
刀で大岩をぶった斬る事だった。
ガッ！という音と共に刀と岩の押し合いが始まった。俺は痺れる腕に力を込める。が、少しずつ押され始めてきた。
「おぉぉぉ……！」
俺は掛け声と共に全体重を刀に掛けるべく高々とジャンプしてみた。
すると、食い込んでいた刃が外れて前に吹っ飛んでしまった。
「うおっ！」
俺は背中から落ちた。その時、潰された！と思った。が、いつまで経っても大岩は来ない。恐る恐る後ろを振り返ると大岩は既に下の方まで転がって行ってしまった。
そう、俺が飛んでその下を大岩が通り過ぎて行ったのだ。

◆　◆

私、ヴァン＝レクシィードはある泉の前に来ていた。場所は聖が

修行している遺跡から2km離れた丘の頂上だ。
この泉は特別で水面に『現実世界』の様子が映し出されるのである。私は聖の修行中にここで監視していると言う訳なのだ。
スゥという静かな音と共に水面にゆっくりと波紋が広がる。この後に様子が映し出される。
しかし、それを見た時、私は青ざめた。急いで回れ右をする。

『炎の翼（ファイア・ウイング）！！』

ヴァンの背中に炎で出来た立派な羽が生える。それをゆっくりと羽ばたかせて上昇する。
「聖……少々頑張ってくれ！」
そう呟きつつ修行の場となっている神殿へと飛び去った。最悪のシナリオを止めに――

◆　◆

「はぁはぁ……やっと着いた。」
俺は石段を登り切った所で大の字に寝転がった。全身汗でびっしょりだ。
「くそぉ……一体何段登ったんだ？」
俺が両手をついて起き上がると手元にあった看板を覗きこむ。そこには――

『只今の石段の数、1億段』

太いマジックでそう走り書きされていた。
ガン！――俺はその看板を一蹴すると拳を握り締めた。
「ヴァン！修行から帰ったらぶっ飛ばすぞぉぉぉぉぉ！！」

本人がいないとはいえ叫ばずにはいられなかった。いや、もしかしたらいないからこそ言えたのかもしれない。
そこで俺は最初の目的を思い出し周囲を見渡す。そう、宝玉を取ってくるという目的だ。
「あった、これか？」
無造作に置かれた宝箱。それには苔が生えていてずっと放置されていた事を物語っていた。
「こいつを持ち帰るんだっけか？」
俺は宝箱の蓋に手を掛ける。すると――
ゴゴゴゴゴゴゴゴ！――音を立てて神殿が崩れ始めた。
「うあぁぁぁぁぁぁ！」
空中で必死に手を伸ばす俺。すると、奇跡的に木の枝に手が掛かった。
しかし、安心したのもつかの間、頭上より大きめの瓦礫が降って来た。
「――！」
ぶつかる！――目を瞑ったその時だ。
ふわっと体が宙を浮くのを感じる。俺は恐る恐る目を開けてみる。すると――
「ヴァン！」
それは炎で出来た翼を生やしたヴァンだった。俺の右手を掴んで瓦礫の合間を縫って飛んでいる。
「聖、予定変更だ！『現実世界』に戻るぞ！」
「はぁ？何言って……！もう時間なのかよ！？」
俺は暴れようとするが、首を掴まれて無理矢理大人しくさせられた。
「予定変更だと言っただろ？一番恐れていたことが起きた。」
そして、間を置いてから言った。
「『現実世界』に『魔物』が大量発生した。」

◆　　◆

俺とヴァンは『修行空間』に来た時と同じ扉を通って『現実世界』へと戻ってきた。

「椿？」

が、そこに椿の姿は無かった。『修行空間』へ行く時は確かに「ここで待っている」と言った。

「『魔物』に襲われた可能性がある。とにかく早く探そう！」

ヴァンが先を急ぎ、洞窟のような壁をすり抜けていく。その後を俺が続き、駅のつきあたりへと出た。

「なっ！？」

その光景を見て俺とヴァンは唖然とした。駅の柱は半分からポッキリと折れ、壁も深くえぐれている。

「くそっ！手遅れか……！」

ヴァンが悔しそうに壁を殴った。その頭上から黒い影のようなものが降ってくるのが見えた。

「ヴァン！危ない！」

俺はとっさにヴァンを押し倒した。『魔物』の腕が俺の肩をかすめる。

「聖、下がっていろ！」

ヴァンは両手を前に出す。

『十字（クロス・フレア）の獄炎！！』

巨大な炎は十字を描いて『魔物』を焦がした。

「椿の消息が心配だ。とりあえず外に出るぞ！」

俺は頷いて駅の出入り口に向かって走った。しかし、床から這い出るようにして何体もの『魔物』が取り囲んでくる。

「くそっ！又かよ……！」

俺は姿勢を低くして腰に手を当てる。そう、そこには刃が剥き出しの刀があるはずだった。が――

「え？刀は……？しまった！あの神殿が崩壊した時に落ちたのか！」

『魔物』はジリジリと迫ってくる。それに合わせて俺も交代する。

「聖！受け取れ！」

その時、後ろからヴァンの声が聞こえた。振り向くと鞘付きの刀が飛んできた。俺はその刀を片手で受け取ると共に鞘を素早く抜いて一回転する。心なしか最初に持った時より重くない。

「これは予備だ！重さと威力は最初に渡した奴よりも劣るが、十分だろう？」

それを聞いて刀が軽くなった気がしたのも頷ける。

「サンキュー、ヴァン！これで思う存分戦えるな……」

俺は刀を両手で持って水平に構える。

「ヴァン！一気に行くぞ！」

「分かった！」

俺とヴァンは手分けして『魔物』に突っ込んでいった。

◆　◆

私、護耶　椿は混乱する人混みに紛れて避難していた。

（聖、無事でいて！）

そう願いながら胸の前で腕を組む。

『うわぁぁぁぁぁぁ！来たぞぉぉぉぉぉ！！』

不意に人混みが騒ぎ出した。見ると、さっきと同じ『魔物』が数体行く手を阻んでいた。

「くそっ！化け物め！」

先頭にいた警察が拳銃を構えて発砲した。

ガウン！ガウン！――次々と打ち込むが一向に効いている様子は

ない。
『ギャァァァァァァァ！！！』
怒りともとれる奇声を発しながら『魔物』は警察を真っ二つに引き裂いた。
警官は声を出す間もなく崩れ落ちる。それを『魔物』は音を立ててむさぼり始めた。
その様子に椿を含め、一般人全員が目を伏せる。
すると、「がぁぁ！」という悲鳴が聞こえた。最後尾にいた警官も引き裂かれたのだ。
私のいる場所は行列の後ろの方、跳びながら移動してきた『魔物』が今にも自分を引き裂きそうな距離だ。
「皆！逃げて！！」
私は無意識にそう叫んでいた。それに瞬時に反応した一般人が無我夢中で走りだす。しかし、全員が思い思いに逃げるので一人ぼっちになっている人もいる。
私は近くの橋に向かって走り出した。ある考えが私の脳裏に浮かんだから。
『ギャァァァァァァァァァ！！』
『魔物』は私の後を追ってくる。私は橋のちょうど真ん中辺りで急停止すると橋の柵に足を掛けた。
（聖が来るまで……絶対死ぬもんですか！）
その思いが行動の引き金となって私は川に飛び込んだ。
スカートだということも忘れて頭から突っ込む私。実は水泳経験があるから。でも、そんな物も流れが速い川では役に立たない。着衣しているなら尚更。
「うっ！あぷっ……！」
溺れかけている体を必死に動かせて掴めるような物を探す。しかし、生憎周囲には細い枝しか無かった。
「椿！掴まれー！」
すると、陸の方から声が聞こえ、前の方に何かが現われた。恐ら

くは刀の柄だと思う。
私は夢中でそれに掴まった。それを渡してくれた主は精一杯の掛け声と共に私を引き上げてくれた。
「はぁはぁ……こ、この声は……」
私はむせ返りながら引き上げてくれた人の方を見る。その声は良く知っている人物の声だったから……
「聖！」
その歓声に応えるように赤髪の青年は微笑んだ。

◆　◆

「やっと……見つけた……」
俺は右手の痛みに顔をしかめながら刀の柄を握る。椿を救う際、自分が刃を持った為、右手が血だらけになったのだ。
「椿、大丈夫……か……？」
俺は椿の方に向き直る。と、椿はいきなり俺の胸に飛び込んできたのだ。
「椿……」
彼女の目には涙が浮かんでいた。それを見て俺もゆっくりと抱き返した。
「ごめんな。もう、一人にさせたりしないから……」
その台詞を言い終わるか終わらないうちに後方でドサッ！という俺が聞こえた。振り向くとそこには無数の傷を負ったヴァンがいた。
「ヴァン！」
俺は椿を放してヴァンに駆け寄る。そのまま辺りを見渡すと既に無数の『魔物』で取り囲まれていた。
「す、すまん……魔力、切れだ……」
ヴァンは肩で息をしながら何とか立ち上がろうと四苦八苦していた。

「椿、ヴァンを頼む。」
俺は短くそう言って刀を構える。
「え？頼むって……もしかして聖……！」
「いや、『覚醒者』にはなっていない。」
期待の声を上げる椿に俺は短くそれだけを言う。
「でもな……」
落ち込む椿を一瞥して刀を水平に構える。
「これ以上、仲間を傷つけられるのは嫌なんだよ！」
まずは正面にいる『魔物』に斬りかかる。すぐに体にへばり付いてくるそれらを力任せに振りほどくと横っ飛びで一旦退く。
「聖、危ない！」
椿が叫んだ直後、俺の後頭部を鈍器で殴ったような痛みが襲う。
『魔物』に殴られたのだ。
「がっ……！」
地へ伏せる俺の体を再び『魔物』が覆い尽くす。
「聖っ！」
「行くな、椿！」
二人の声がひどく遠い物のように聞こえる。

『灼熱（マグマ・ボム）の弾丸！！』

しかし、それらは一瞬で消え失せた。ヴァンの最後の魔力で助けてくれたのだ。
「く、くそっ……俺が…『覚醒者』…に、なってた……ら……」
口の端から一筋の血が流れる。頭痛もひどい。俺は肩で息をしながら二、三歩歩く。
「っ！」
しかし、すぐに膝をついてしまう。俺は歯切りする。自分に力がないのが悔しくて涙が出そうになる。
『ギャァァァァァァァァ！！』

すると、『魔物』は俺の頭上を飛び越して満身創痍のヴァンと無防備の椿へと襲いかかった。
「ぐっ……やめろー！」
俺は『魔物』を追うが足がもつれて速く走れない。そこに更に追い討ちが掛かる。
「なっ！？」
翼を生やした銀の鎧のような『魔物』が俺の頭上で停止していた。その口元には禍々しく光る紫の球体。
俺が何か行動を起こすより早くそれは俺に直撃し、地面に叩きつけられてバウンドした。砂煙が辺りに充満する。
「うっ……げほっ！げほっ！」
全身血にまみれながら右手を見る。すると、そこにある筈の刀が柄だけ残されて後は無残に砕けて辺りに散乱していた。
「あっ、ああ……！」
俺は仰向けの状態から右手を掲げて刀の柄を見つめる。立ち上がろうにも力が入らない。
「椿、逃げろ！」
遠くからヴァンの声が聞こえる。俺は体を反転させてうつ伏せになる。すると、そこには椿を庇って奮闘しているヴァンの姿があった。
（ヴァン……）
俺は両の拳を握り締める。
（何で？何でだよ……俺は修行を乗り越えたんだぜ！何で力を得られないんだよ！）
心の中で叫んで立ち上がる俺。それを見て椿は「聖、逃げて！」と叫ぶ。
「……逃げられるかよ。もう、誰も……誰も傷付けさせない！」
カァァァァァァ――その叫びに呼応するように俺を光が包む。
一般人にはそれがただの光にしか見えないだろう。しかし、『覚醒者』には巨大な魔力の渦に見えるのだ。

「こ、これは……」
俺は訳が分からず自分の体を見つめる。
「聖、イメージするのだ！今、お前は『覚醒者』の魔力を手に入れた。後は能力（ちから）をイメージすれば『覚醒者』となれる！」
『魔物』と組み合っているヴァンが早口で叫ぶ。
（イメージ？）
俺は必死に思考を巡らす。
（俺が欲しいのは……誰も傷つかないような剣）
そして、無造作に右手を掲げる。
「俺が欲しいのは……皆を守れる剣だぁー！」
声を出してそう叫ぶ。それと同時に顔を伏せてしまった。万が一の事を思ったらやりきれなかったのだ。
ズン――辺りに重々しい音が響く。次に顔を上げるとヴァンの周囲の『魔物』が全滅していた。
「こ、れは……？」
俺はヴァンの足もとに刺さっている大剣を見つめた。光のように輝くそれと同じ輝きを俺の右手も放っていた。
この時の俺はまだ気付かなかった。俺の額に『光』の印が浮かんでいる事に――
椿が息を飲み、ヴァンが歓喜の声を上げる。
「黄昏　聖……お前は【光】の『覚醒者』だ！」

～続く～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0844d/

光と闇

2010年11月16日08時34分発行